

近代植民地国家とイスラーム — 19 世紀末の蘭領東インドからのメッカ巡礼について —

國谷 徹(東京大学大学院)

ニューズレターに研究紹介を書いて欲しいということで、編集委員の方々から機会を頂いたのだが、あらためて過去のニューズレターを見返してみると、そういう種類の文章が載った先例というのはあまり無い。しかも筆者の研究対象はマレーシアではなくインドネシア、オランダ植民地時代の歴史であって、JAMS 会員のおおかたの関心からはかなりずれているような気もする。研究紹介といっても、博士論文に向けて悪戦苦闘中の状態だから、あまりまとまった内容になるとは思えないが、現時点で考えていることを書いてみるということでお許しいただきたい。

1. 関心の所在

筆者の研究テーマは、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのオランダ領東インド各地からのムスリム住民のメッカ巡礼を取り上げ、巡礼者数の増加、巡礼をめぐる状況の変化、これに対するオランダ植民地政府の対策を分析することである。

19 世紀半ばから末にかけて、蒸気機関や造船技術の進歩、スエズ運河の開通(1869 年)などを契機としてヨーロッパ・アジア間の蒸気船による交通が大幅に発展した。このことは両地域間の経済関係や人・物の移動、また植民地支配のあり方にも大きな影響を与えたが、そのひとつとして、蘭領東インドからメッカ巡礼に向かう人々の数が増加したことがあげられる。

メッカ巡礼はイスラームにおいて 5 つの基本的な宗教的義務(信仰告白、礼拝、巡礼、断食、喜捨)の 1 つとされるが、メッカから遠く離れた東南アジア諸地域のムスリムにとって、この義務は長い間、ほとんど実行不可能なものであった。しかし 19 世紀後半以降、メッカ巡礼は徐々に容易に実行可能なものになっていき、実際に毎年何千、何万というムスリムが巡礼に赴くようになった。それは、植民地支配下にある「原住民」の自発的かつ大規模な国際的移動という、植民地支配者側にとってある意味で想定外の、特異な状況をもたらした。東インドにおけるイスラームの影響力拡大を政治的脅威と見なすオランダ植民地政府は、当然ながらこの動きに対して、抑圧あるいは監視・統制を目的とする干渉を試みる。

しかし同時に、蘭領東インドからのメッカ巡礼は当時の蒸気船海運業にとって大きな利益を生むものであり、海運業者は巡礼者の海上輸送をめぐる競争を繰り広げていた。また、これら海運業者の現地エージェントや巡礼ガイドなどがメッカ巡礼に携わって利益を得ていたし、メッカのシャリーフ権力やオスマン帝国のスルタンにとっては、メッカ巡礼

者の保護はイスラームの守護者としての自らの正当性を示すために重要であった。さらに、巡礼期間中に世界各地からの膨大な人数が一箇所に集まることによってしばしばコレラ、ペストなどの伝染病が発生し、このことがヨーロッパ諸国の深刻な関心呼んだ。このように様々な利害が関与するメッカ巡礼に対して、オランダ植民地政府が植民地の治安という観点から干渉することは様々な問題を生じさせた。

にもかかわらず、蘭領東インドからのメッカ巡礼はおおよそ 1900 年代までにはかなりの程度まで制度化され、植民地政府の監視・統制化に規則的に行われるようになる。その過程を分析することで、近代的植民地国家・蘭領東インドの形成とインドネシアにおけるイスラームの展開過程の関係についての考察を試みる。

2. 研究史的立場づけ

最近 20 年ほどのインドネシア・イスラームに関する歴史研究は、従来の 2 つの研究傾向に対する批判を中心に展開してきたと考えられる。第一は、インドネシアのイスラームは外部から持ち込まれた文化要素であり、現地社会においてごく表層にしか浸透しておらず、インドネシアのムスリムの多くはシンクレティックな傾向の強い名目的ムスリムに過ぎない、とする傾向である。このような認識は、元をたどれば植民地時代にその起源を持つと考えられるが、1970-80 年代には、ギアーツが提示したサントリ・アバンガン・プリアイという有名な文化類型が広く受け入れられたことで一般的となった。

第二の傾向は、インドネシア史全般における民族運動・独立運動史研究への偏重である。この傾向の中では、イスラームは反植民地闘争の旗印として、民衆を結束させるためのイデオロギーとして、あるいは一つの政治勢力として描かれた。例えばサルトノ・カルトディルジョによるジャワの民衆運動・抵抗運動の研究などを挙げることができる。

これらに対する批判から生じた近年の傾向として、もっとも顕著なのは他のイスラーム諸地域、特に聖地メッカ・メディナやエジプトのカイロなど中東諸地域との関係に注目する研究である。[Azra1992]は 18 世紀における東南アジアと中東のウラマーの間の交流を、ウラマー間の師弟関係を軸に分析し、イスラーム諸学において両地域間に活発な知的交流が継続して存在したことを明らかにした。また、[Laffan2003]は近現代における蘭領東インドと中東のムスリム間の関係とその変化を描き、その中で、彼が“Islamic nationhood”と呼ぶある種の民族意識が生じていたことを主張している。

これらの研究は、上記の第一の傾向に対しては、東南アジアがただイスラームを受動的に受け入れてきただけでなく、歴史を通じて中東のイスラーム地域と知識人層による活発な相互交流を維持してきたと論じることにより、外部から持ち込まれた要素としてイスラームを見る一面的な捉え方を批判している。また第二の傾向に対しては、民衆運動や民族運動においてイスラームが単に動員のためのイデオロギーであっただけではなく、他の

イスラーム諸地域との歴史的関係を背景にした、イスラームを基盤とする民族形成という方向性も模索されていたことを示し、インドネシア民族主義や独立後のインドネシア国家とイスラームの関係について再考を促すものであるといえる。

ただ、これまでのところ、これらの研究はいわゆるイスラーム知識人層を対象としたものにとどまっている。筆者は、メッカ巡礼を通して知識人層にとどまらない両イスラーム地域間の関係に焦点を当てることで、この点についての考察を深めようと試みる。

一方で19世紀末から20世紀初頭にかけての時代は、独立後にも連続性を持つ近代国家の諸制度が形成されつつある時代としても捉えられる。このような議論は1980-90年代に主にオランダにおいて展開されてきた。1950-60年代の西洋の研究者たちは、いわゆる「自律史観」の考え方のもとに、インドネシアが植民地支配による抑圧から解放され、本来の歴史的発展の過程を取り戻しつつあると観察した。しかし、その後のスハルトによる新秩序体制の成立と開発独裁的な政策の推進は、インドネシア国家が制度面において植民地国家蘭領東インドから多くを引き継いでいることを浮き彫りにしたといえる。このような状況を受けて、それまで強制栽培制度期と独立運動期の2つに関心が集中する中で比較的等閑視されてきた植民地支配後期(19世紀後半-20世紀前半)への関心が高まった。

もちろん、スハルト政権が崩壊し、植民地時代からの連続性を持つとされる諸制度が大きく揺らぎつつある現在では、このような視点からの研究は90年代までとは異なる意義付けをされなくてはならない。すなわち、近代的植民地国家の形成からスハルト政権までをひとつの連続性の中でとらえたうえで、現在生じている様々な問題(たとえば、地方分権化の推進など)の歴史的起源や背景を、この時代の諸制度の中に見出そうと試みる視点である。

このような視点で見たとき、イスラームに対する植民地国家の政策・対応は重要な問題のひとつである。蘭領東インドにおけるイスラーム政策としては、著名なイスラーム学者スヌック=フルフローニェによって「宗教的活動に対しては容認・不干渉の方針を維持する一方、政治的意図を持った活動に対しては厳しく弾圧する」という原則が確立されたことが知られているが、では何が宗教的活動であり、何がそうではないのかを誰が決めるのかという問題が残る。結局、それを決めるのは国家の側であり、宗教関係の諸制度の形成ということになるだろう。その際、恐らく最も困難であったのが、間違いなくイスラームの基本的な宗教的行為のひとつでありながら、同時に植民地の領域を越えたさまざまな利害が関与するメッカ巡礼への対処であったと思われる。従って、植民地政府のメッカ巡礼対策を分析することは、近代的植民地国家の形成に伴って宗教としてのイスラームの位置づけが(少なくとも国家の側からは)規定されていく過程を明らかにするという意味を持つ。

3. 研究内容

具体的な研究内容についてはまだ断片的にししか述べることができないので、現在検討している課題をいくつか提示するにとどめたい。

第一は、植民地政府が収集したメッカ巡礼に関するさまざまな統計データの分析である。巡礼者数の統計はすでに[Vredenbregt1962]によって提示されているが、詳細な分析はなされていない。また彼が利用したもの以外にも、ジェッダのオランダ領事館から報告された統計の中には、巡礼者数を出身県ごとに集計したものや巡礼者の輸送に携わった船舶に関する統計などが存在する。これらを分析することで、巡礼の実態、巡礼者の出自や背景などについて、これまでよりも立ち入った考察が可能になると思われる。

第二は、植民地政府の政策的対応の分析である。既に拙稿[國谷 2004]において巡礼パスポート制度の成立と展開過程を検討したが、それに加えて、巡礼にまつわる様々な個別具体的な問題に対する植民地政府の対応とその政策的方針を分析し、植民地支配における宗教政策のあり方を考察したい。

第三は、ジェッダに設置されたオランダ領事館と巡礼の関わりについてである。オランダ本国によって設置された領事館でありながら専ら蘭領東インド巡礼者への対応を行ったジェッダのオランダ領事は、植民地政府当局とは異なった観点から巡礼の問題をとらえ、問題の解決・状況の改善においても異なる方向性を示した。それは端的に言えば、現に存在する活発な海運業とそこでの巡礼者輸送業務の重要性を第一の前提とし、そこにおけるオランダ海運業の利益に適合するかたちでの解決策の模索であった。植民地政府にとっても、蘭領東インド巡礼者の管理・監視のためにはジェッダの領事館が必要不可欠であったから、このようなジェッダ領事館の立場は植民地政府の巡礼対策にも影響を及ぼした。

他にもいくつか取り上げるべき課題があるが、まだまとまっていない。結論めいたことは何もいえないが、いまだ研究すべきテーマが数多く残されているインドネシア・イスラム史という分野において何がしかの貢献ができるよう、今後も微力を尽くしたいと思う。

[引用文献]

Azra, Azyumardi 2004 *The Origins of Islamic Reformism in Southeast Asia: Networks of Malay-Indonesian and Middle Eastern 'ulama' in the seventeenth and eighteenth centuries*, Asian Studies Association of Australia

國谷徹 2004 「19 世紀末における蘭領東インドからのメッカ巡礼について：巡礼パスポート制度の展開過程を中心に」『日蘭学会会誌』29-1, pp. 15-28

Laffan, M.F. 2003 *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The umma below the winds*, London/New York: RoutledgeCurzon

Vredenbregt, Jacob 1962 'The Haddj: Some of its features and functions in Indonesia', *Bijdragen tot de taal-, land-, en Volkenkunde*, 118, pp. 91-154